
使い魔なご主人

クロイツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使い魔なご主人

【Nコード】

N7356E

【作者名】

クロイツ

【あらすじ】

目が覚めたら上空にいて落下中、地上に降りたら800年も経っていた！？自己中心的な使い魔とそんな使い魔に振り回されるご主人の生活を描く、剣と魔法と学園のドタバタコメディーここに降臨！「降臨という程たいそうなもんじゃねえな」とつ、とにかくはじまり！。

ぶろろーぐ？（前書き）

初めて書く小説ですので読みにくいところや間違いが多々あると思いますが、苦情などは一切受け付けませんのでそれでも読んでやるよという方のみお読み下さい。ですが間違いがあると教えてくれるのは大歓迎ですのでよろしくお願いします。それと他の方が書かれている小説に極力にならないようするつもりですが、明らかにパクっているだろうというときは知らせてほしいです。長くなってしまうかもしれませんが、みなさまの暇潰しにでもなれば幸いです。

ぶろろーぐ？

夜になり、こどもはもう寝なさい、といわれるような時間。しかし素直に寝るこどもなんてものは少ないもので。どこの家からか声が聞こえる。

「ねえ、おとーさん、またおはなししてよー。」

「またか？しょうがいなあ、お前は本当にお話が好きなんだなあ」

「ううん、ちがうよ。おとーさんのおはなしがすきなノー。だっておもしろいんだもん」

「そうか、じゃあ今日はなんのお話にしようかな」

そう言つと父親は少し考えるそぶりをしたあと、ある話を思い出しはなし始めた。

「これはお父さんのお父さんが話してくれたお話なんだけどね。魔王を倒し、世界を救った魔法使い

のお話だよ。」

「ええー！、まおうをたおすのはゆうしやさまじゃないの？」

こどもは不思議そうにくびをかしげながら父親にそうたずねた。

「うーん、普通はそうなんだけどね。これはちょっと変わったお話なんだ。」

じゃあ、はじまりはじまり」

そう、これは現実の世界から遠くかけ離れている、魔法や魔物が普通に存在し、まだ人々が一つの言葉を話す、そんな世界の話。

第一話・落下そしてはじまり（前書き）

基本マイペースな性格なので更新速度は一週間に一回できたらいい
ほっだというくらいで考えています。では、どうぞ

第一話：落下そしてはじまり

「目を開けると、そこは空の上でした………」

はるか遠くまで見渡せるほどの上空でオレのご主人はゆっくりとそう言った。

「なあ、わかつてると思うがこの高さから落ちたら死ぬぞ？」

「ん……ええっ！！マジで！ってか超たけええええええ！！！」

やっと自分の置かれている状況がわかったらしい。気がついてなかったのか？

オレのご主人ながらまぬけだ。パニックっているがようやくなんとかしようとしている。

「った！たたっ大気に眠りし風の乙女よ、我が声に従いその力を示せ！

《ユクシト・ハガル！！》」

手を体の下へと突き出し、風の初級魔法の風圧で落下速度をおとそうとするご主人。

「ふう〜、これで何とか、あだっ！！！」

ならなかったようだ。見事にしりから着地して転げまわってる。

「おいバロンっ！お前僕と契約しているんだから助けてよっ！」

肩まで伸びた銀髪からのぞく碧眼に涙を浮かべながらこちらを睨む、まだ顔に幼さの残る少年。

オレのご主人こと、^{マスター}“シャルル・ローレンス”。少し女顔だが性別上

男に分類されるガキ、ちなみに16歳だ。

「バロン、さっきから誰と話してんの？」

オレか？オレはさっきからコイツが呼んでる通り“バロン”という。

ほんととはもつと長い名前なんだが、今はそんなことどうでもいいだろう。

職業は闇の精霊王なんていうのをやっている。自分でいっててなんだが、職業か？

「無視か、そうか無視なのか」

容姿はそつだな。高位精霊は人の姿をとることができるんだが、腰まで伸びた黒髪

と黒眼が特徴だな。基本服も黒一色だ。

歳は5060歳だ。なんだじいじゃねえか、とかいうな。精霊はこれが普通なんだ。

さつきご主人がいつていた通りオレはコイツと契約している。

「いいいいいよ、どうせ僕なんか契約していても助けてもらえないんだ。」

「.....」

おっと、ご主人が体操座りをしながら地面にのの字を書き始めた。そろそろ相手してやるか。

「オレが悪かったって、あやまるから、なっ？」

「本当にそ思ってる？」

「全然」

「即答！？じゃあさっきの言葉は何だったの？」

「冗談だ、半分は」

「半分は本気！？」

「ご主人、話が進まないんだが」

「ごめん、つていや明らかにお前のせいだろ！なんで僕があやまら

なくちゃいけない
だよ!!」

「で、何でいきなり僕ら空になんかいたんだろ？たしか魔王の城にいたはずだよね？」

そう、オレたちは魔王城にいた。何故かって？そりや魔王を倒すために決まってるんだろ。

まあこんなやつが魔王を倒せるはずがないと普通思うだろ、大丈夫だオレもそう思ってた。

だが、こんなやつでも腕はたしかなんだ。オレと契約しているのが証拠だ。

たしか・
・
・
・
・
・

[illegible]

「ぐあああああああ――！ば、ばかな、こんなガキごときに我が負けるはずがない」

「これで最後だ、バロンっ!!」

ひとりでももう倒せるだろうに、めんどくさいなあ。でもしょうが

ない、やってやるか。

「「終焉よりいでは永遠の闇、我が身に纏いしは漆黒の翼、偉大なる闇の精霊たちよ今

こそ我らに仇なすものを打ち滅ぼす槍となれっ！！

《メル・ティース・アルジス！！！！》「」

ご主人とオレで今使うことのできる、闇の究極魔法を魔王へと放つ。
ご主人の手へと

集中した闇の塊はどんどんその質量を増し黒い巨大な槍と化し、
魔王の体を刺し
貫いた。

一点に集中させずに放てば大陸一つくらい軽く吹き飛ばすほどの魔法
だ。しかし、やつは

生きていた。

「ふっ、我はまだ・・・負けてなど・・・おらん」

さすがは魔王といったところか。というか面倒くさかったからって
手抜き

すぎたかな。ばれないようにしよ。

「ええっ！どうして！？なんで生きてるの！？あれだけダメージを

与えたんだから

もう立ってられないはずなのに。くそっ、僕の力が足りなかったのか・・・バロン
お前はどうか？」

ばれたらまずい。ここは本気をだしたってことを示しておこう。

「おかしいな、ちゃんと本気で50%の力出したのに」

「お前のせいなああああ！！なんだよ50%って全然本気じゃねえじゃん！！」

なんで本気でやらねえんだよ、闇の精霊王が聞いてあきれる！」

「さあ、かかってこい我はまだ戦えるぞ」

なんでばれたんだ？おれのどこがだめだったんだ。もういい、

「ああん！うつせーよヘタレのてめえに言われたかねえよ。面倒だから手え抜いた、

悪いかよ！！」

「逆ギレ！？」

「我を・・・無視・・・するなあ！！」

魔王の声と共にオレたちの体が光に包まれる。しまった、手を抜いたとはいえまだこんな

力が残っていたとは、油断していた。

「これは我の最後の力だ、倒すことはできずとも貴様らを道ずれにしてやる、みんなだ」

なかよく死ぬんだ！！はっはっはっはっはー」

魔王の最後の声を聞くと共にオレたちの体に光がまわりついた、
と思った瞬間意識が

遠のいていった。
。
。
。
。
。
。
。

[illegible]

「と、いうわけだな。魔王は最後の力でオレたちを時空魔法か何かでとばした。」

それぐらいの力しか残っていなかったんだな」

「と、いうわけだ、じゃないよ！・・・まあいいや、いつものことだからもう

「気にするのはやめよ……疲れる」

ご主人はそういうと力が抜けたように、地面へとすわりこんだ。しかし、最後の力

だったとはいえ、これだけなのか？なにか面倒なことがおこりそうな気がする。

「どうかした？」

「いや、なんでもない」

まあ、面倒が降りかかるのはいつもご主人だからいつか。

「これからどうするんだ？」

「うーん、ここは・・・見た感じルルティア王国の近くの草原みたいだから

まずはルルティアにいきましょうか」

ルルティア王国っていうのはこの世界、《デイス・ノーティス》のなかでも三本の

指に入るほどの大国だ。ルルティアでは世界最強と謳^{うた}われた騎士団があること

でも有名だ。いや、あつたというべきか。その騎士団でも魔王には歯が立たなくボロボロ

にされたと聞いている。

「ほらっ、いくよバロン」

「ああ、わかった。今行く」

そうしてオレたちは歩き出した。これから起こるドタバタな生活に巻き込まれようと

していることなど露にも思わずに。

「いやなナレーションにつけないでくれ……。本当にそうなりそうだから」

第二話：驚愕そして状況把握

モンスターに何度か出くわしながらも、三時間ほどで目的の場所に着くことができた。

ルルティア王国は多くの街などがたまってできており、オレたちはそこでもっとも大きい街、首都ティルタニアにきていた。

オレはご主人の肩の上から街を見ていた。なんで肩からだって？オレは人の形でいる

とき以外はたいてい黒猫の姿でいることが多いからだ。楽ができるしな。

「なんか街の中が騒がしくない？」

ご主人は首をかしげながら聞いてきた。まあ確かに騒がしいな。

「もう魔王を倒したってことが伝わったのかな？」

「いや、それはさすがに早すぎるだろう」

いかに大国とはいえまだ伝わっていないはずだ。だが街へ入ると、祭りのような飾り付け

が見える。

「だれかに聞いてみるのが一番だろう」

そう言うところ主人は近くにいた老人に話しかけた。

「あの、すみません。今日は何かお祭りでもあるんですか？」

「ん、なにか、じゃと？今日は魔王が倒されて、世界が平和になった記念すべき日じゃろが。」

「えっ！もう魔王を倒したことが伝わっているんですか？」

「はあ、なにいうとるんじゃ。魔王が倒されたのは遙か昔、今日でちょうど800周年じゃろ。大魔導師シャルル様になった夢でも見たのかね？」

老人は頭の痛い人を見るような目でご主人を見た後、どこかへ行ってしまった。

「どっ、どどどどっということー！？」

「ああ、たしかにおかしいな。いったいどうなってるんだ？シャルル様って、くく」

「ええ、そっち！？おかしいのは魔王が倒されたのが800年前って方だよね！？」

オレはご主人が様付けで呼ばれる方がおかしいと思うのだが、ご主人は違うようだ。

「なんでそんなに落ち着いてんの！？」

「ああ、精霊は時間とかにあまりこだわらないからな。」

こだわらないというよりはオレがもといた世界、つまり精霊がすむ精霊界には時の流れとかが基本的に存在しない。だが、オレだって全く驚いてないわけじゃない。

「それより、本当に800年も経っているのか確かめなくていいのか？もしかしたらあの爺さんがボケてただけかもしれないだろ」

「でも確かめるっていったって、どうやって？」

「人に聞くなり、城に行って文献をあさるなりすればいいだろう」
それから道行く人に聞いてみたがさっきと同じ言葉しか聞くことができなかった。

魔王が倒されたのは800年前だ、と。

「あとは城に行ってみるしかないな」

「でも、問題は入れてくれるかだね」

「いいよ！」

城の門の前に立ち、槍を持った門番らしき人に聞くと親指を突き出しながらそういった。

「そうだな、言いわけが……っていいのかよ！あんな門番だろ！そんなに簡単に通していいの！？しかもいいよ！って……」

「細かいことは気にするな、いくぞご主人」

「う、うん」

城の中は王の部屋以外は開放されているらしく、一般人のやつも

結構いた。前に来たと

きはかなり検査が厳しかったのだが、ずいぶんとかわっている。

しかし城の内部の配置はさほど変わってないらしくオレたちは迷うこと

なく資料室までいくことができた。それからしばらく探したが800年経っていると
いうのはどうも本当のことらしい。

「やっぱり、魔王の仕業だよね？」

「ああ、あの光は時空転移の魔法だったんだな」

「はあ…これからどうしよう…」

ご主人はがつくりと肩を落としている。無理もない、魔王を倒す旅がやっと終わったと思ったら今度は時間の旅とは。相変わらず面倒ごとに巻き込まれる性質は変わらない。

「帰る方法を探すにしてもまずは泊まる場所を探さないとない。いつまでも野宿とい

わけにはいかないだろう。・・・っん」

「どうしたの？」

ご主人が俺の持っている本を覗き込もうとしたのでオレは調べていた文献をや資料を

ご主人へと見せながら説明した。

「これによると、魔王が倒された後も魔物は変わらず人々を襲っていたそうだ」

「うん、たしかにここに来る途中に何度か襲われかけたけど、それが？」

「騎士団やギルドでそれを倒していたんだが、しだいに人手が足りなくなり、

各国ではそれを防ぐため魔導師や騎士を育てる学園というものを建設し騎士団や、

ギルドに送りだしているそうだ。腕があれば誰でも入れて、魔法のエキスパート

のもとで学ぶことができる。しかも泊まる場所もあるらしい。行ってみる価値

はあるんじゃないのか？」

「うーん、そこしかないか……。もとの時代に帰る手がかりがあるかもしれないし」

「この学園はこの世界でも一、二位を争う大きさで特に技術が発達しているみたいだ

から、ひょっとしたら何かみつかるかもな」

「いつまでもくよくよしててもしょうがないっ！！そうと決まったら早速行くかつ」

ご主人は自分の頬を叩き、気合をいれると歩き出した。

学園はそっちじゃないんだが・・・まいつか。オレはご主人に教えることもなく、

反対の方向へと歩きだした。

第二話：驚愕そして状況把握（後書き）

この小説を書こうと思ったのは国語の成績が悪かったからなんですよ、それで文章力を付けようと思って。自己満足ですがね。駄文ですがこれからも見てくださると有りがたいです。

第三話：動揺そして入学準備（前書き）

相変わらず更新速度遅いな・・・でも宿題が多いんです！言い訳です
ね、はあ・・・ではどうぞ

第三話：動揺そして入学準備

「ひどいよ！僕、全然違う方に歩いてたじゃん！そっちじゃないって言つてよ！」

「そっちじゃない」

「遅いよ！今言つても意味ないじゃん！」

どうやらご主人はオレが置いてったことに怒っているみたいだ。聞かずに行く方が悪いと

思ふのだがここでは言わないでおこう。ところでここはもう学園の前。それにしてもで

かい。もしかしたら城より大きいんじゃないか？ご主人もさつきから口をあけて驚いてい

る。しかし、阿呆面だな。

「なにか失礼なこと考えてない？」

「ああ、阿呆面だなんて思つて」

「そこは否定しとこうよ！はっきり言つなよ、そんなこと自分でも思つたよ！はあはあ……」

「息が乱れてるぞ、情けない。」

「誰のせいだよ…」

こんなやりとりがあつたあと無事学園に入学する許可を得ることができた。入学式は明日

といていたので運がよかったな。しかし入学の許可が簡単にとりたのは驚いたな。

なんでも入学してから落とされる人のほうが多いと試験官が言っていた。ご主人なら実力

は心配ないだろうが…ヘタだからな、心配だ。緊張すぎて失敗するかもしれないがまあ

なるようになるだろう。

「それより、寮が使えるのは明日からだが」

「うーん、今日は野宿するしかないか」

野宿をすることにしたオレたちはしばらく歩くとちょうどいい広場を見つけた。

今はもう人の顔も見えないほどくらいなので人気はない。

「ご主人、飯」

「わかった、って！これってなんか逆じゃない？」

「気にするな、いつものことだ」

「精霊はたべないでも平気なんだからいいだろ？」

「オレは人間の食い物を結構気に入ってるからな、いいから早く作ってくれ」

「たまに僕が使い魔なんじゃないかって思うことがあるよ・・・」

「なんだ、今さらだな。オレはいつもそう思ってるぞ」

「ええっ！本気で！？冗談だよね！？ねえ！ねえ！」

金はいくらがあったので、食事もそこそこにとることができた。しかしご主人にいつもの元気がない。

「ねえ、ほんとに僕らもとの時代に帰れるのかなあ？」

「さあな・・・なんだ寂しくなったのか？」

「そりゃね、だってこの時代のことなんてなんにもわからないし、知ってる人も一人もないんだよ？しかも契約している使い魔はワガママで言うこと聞かない役たた・あだだだっ痛い痛い！！」

「オレじゃ不満だったのか」

「すいません僕が調子こいてましただから手えはなしてえええっ割れるっ頭蓋骨が割れるっ！！」

ご主人の顔を片手でつかみ持ち上げる（いわゆるアイアンクロー）とミシミシという音が聞こえてくる。ご主人の顔がナスのような色に変色し始めたので放してやった。

「まあ、こんなことになったのは1%くらいオレにも責任があるからな。手伝ってやるから元気出せ」

「バロン・・・ありがとう！きみがそんなこといつてくれるなんて・・・ん？いや違う違うっ100%お前の責任だろ！！いつもはそんなこといわないから勘違いしちゃったよ！、僕のどこが悪かったっていうんだよ！？」

「存在」

「生きる権利すら否定された！？」

どうやらご主人は疲れたらしくげっそりとした顔でもう寝るといつて地面に寝転がった。明日のためにおれも眠るとしよう。・・・な

んだかんだいいながらもご主人と一緒にいることは楽しい。唯一才
レと契約しようといってくれた存在だから。まあそのことは追々話
すでしょう。

「さて、明日はどんなことに巻き込まれるのか、ご主人の困った顔
を見るのがいまから楽しみだ」

「あんた本当にSですね！」

おっと。

第四話：邂逅そして勘違い

眼を開けると木々の隙間からうつすらと日の光が見える時間帯 - だいたい朝の六時ごろだろうか - になりオレとご主人は荷物などをまとめ、学園へと向かった。朝食で丁度よく時間をつぶし、今はもうは八時ごろ、ちょうど始業式が始まるいい時間帯だ。オレたちは縦に4、5メートルはあるうかという巨大な学園の門の前へと立つ。

そして機関車へと乗り込む。そう、機関車だ。昨日きたときに気づいたのだが学園の敷地は広すぎる。城をゆうに超え、学園が一つの都市と化しているように見える。いや、実際にこの学園にいればほとんど物に不自由することはない。店や病院など設備がありえないほど充実しているためここは学園都市と呼ばれているようだ。学園の門から学園まではかなり距離があり一本の機関車が通っている。

学園の周りにはところせましと店や施設が並び、学園に通っているであろう学生たちによって溢れかえっていた。学園の説明をしておくと（ご主人のパンフレットを見た様子だと）、学園は主に初等部、中等部、高等部の3つに分けられており、初等部と中等部では魔法の基本的なことや体術などを学び、高等部では実践など本格的なことを学ぶらしい。騎士も魔導師も剣だけ、魔法だけというわけにもいかず幅広い戦い方を身に付けるためいっしょに授業を受けるようだ。

そしてしばらくたち学園生活に慣れると何人かでパーティを組み実践の課題をこなしていく、というものだ。ところでご主人が入るのは高等部だ。説明も終わったところで列車が発し始めた。オレは猫の姿になりご主人の肩に飛び乗る。

「どこかあいてる席ないかな？」

列車の中は混んでいたが、少し探し回りちょうどあいている席を見つけたことができた。

「あいててよかったね」

列車は四人で座れる個室のようになっていて、ご主人が座った向かいには先客が一人いた。どうやら寝ているらしく、規則的におなかが上下に動いている。

「この人も学園の生徒かな？ここの学園のローブ着てるし」

ご主人が覗き込んだソイツは、列車に乗るときに支給された学園専用のローブを着ていた。今はご主人も着ている。渡されたときにご主人の服が余りにボロボロだったので変な目でみられたが。

目の色は寝ているのでわからないが髪は明るい青色で肩にかかるかからない程度、オレにはよくわからないがご主人がいうには結構美形の男らしい。

「そうだご主人、言うのを忘れてたが800年前から来たことと魔王を倒したとかいうのは黙っていたほうがいい」

「ええ？どうして？」

「そんなことをいっても信じる奴なんていないだろ。頭がおかしい奴だと思われて終わりだ。そう思われたくはないだろう？まあご主人にミジンコ並みでもプライドがあったならの話だが」

「僕にだってプライドくらいあるよっ!!」

「・・・・・・・・んっ」

どうやらご主人の叫び声で起こしてしまたようだ。閉じられていた目から鮮やかな紫が覗く。その目がご主人を捕らえると、細かった目が急に見開かれ、ソイツはご主人の方へと乗り出した。

「ああっキミ、綺麗な顔をしているね。キミもこの学園の生徒かい？こんな美しい人に入学早々で会えるなんて俺はなんて運がいいんだ」

急に口説きはじめた。確かにご主人は女顔に見えるが・・・・ご主人にそんな趣味ないよな？ちょっと心配だ。ご主人はこっちに助けを求めているように見えるが。しかし、うろたえているご主人を見るのはおもしろいな。もうしばらくほっつておこう。

「えっと、あの、その僕・・・男、なんですけど・・・」

「・・・・・・・・えっ？そうなのか！？はあ、こんな綺麗な顔してるのに残念だな」

「いや、そんなこといわれてもうれしくないような・・・」

「まあいい、そういえば自己紹介がまだだったな。俺はグレイフェルト・アヴィエーンだ。気軽にグレイと呼んでくれ。ここの学園の

高等部一年だ。よろしくな」

蒼い髪のソイツ、グレイがご主人の方へ手を差し出しながらそう言った。

「よくはないんだけど・・・僕はシャルル・ローレンス。僕もこの一年だよ。こっちこそよろしく」

ご主人は差し出された手を緊張した様子で握り返した。

「ん、シャルル・ローレンス？魔王を倒した英雄の名前じゃねえか。大層な名前付けられちまったんだなあ。名前のことでいじめられたりしたことないか？」

「えっうん、うんまあね。そんなこともあったかな・・・はは」

「そうだろうなあうんうん、それとさっきは悪かったな。急に口説き始めちまって。俺、よくやっちゃまうんだよな可愛い娘とか見ると」

「うん、いいよ、もう気にしてないから」

そういいながらも、ご主人の首を見るとまだ鳥肌がたっていた。まあ男に口説かれた経験なんてあるわけないから当然といえば当然なのだが。

「あっそうだ、こいつはバロン。僕のペットだよ」

さっき助けを無視した腹いせなのか、ご主人はオレをペットとして紹介しやがった。しょうがないのでしばらくの間はペットとして過ごすとするか、ちくしょうバカにしやがって。

「にゃー（誰がペットじゃコラ、後で覚えとけよご主人）」

「ひっ！！」

「なあ、こいつメスか？」

「動物でも口説くの！？」

「いやさすがに俺でも動物は少し迷うぞ。ただなんとなくただの猫にしちゃ気配が違うように感じてな。気のせいだろうけど」

少しというところが非常に気に入るところだが、この青髪なかなか鋭い。

「いやっ、そんなことないってただの汚い猫ダヨー、はは」

ご主人、語尾がおかしくなっているぞ。それと、

「いだっ！目に指が！目が見えん！」

ム力ついたから目にネコパンチしてやった。いいきみだ。

第五話：恐怖そして担任（前書き）

この使い魔なご主人のなかには本来バロンたちが知っているはずのないことも書かれているかもしれないが、そこはスルーしていただけるとうれしいです。それとかなり遅れてしまいました・・・。

第五話：恐怖そして担任

列車に揺られること30分ほど、ようやく学園の目の前にまで来ることができた。学園内へと続く道の前にはかなりの数の人間が集まっていた。まあ、人間だけではないのだが（魔導師の使い魔なのか、猫やふくろう、精霊、その他もろもろも見えた）。クラス分けの紙でも張り出されているのだろうか？人ごみに近づくにつれて聞こえてくる声を拾えばどうやらその通りだったようである。近くに来たオレたちの周りには、自分のクラスを友に伝える声や自分の好きな人といっしょになることが出来た喜びから叫ぶ声などが飛び交っている。ご主人も自分のクラスを確認しようとするが、背が足りない。周りの生徒たちの波にさらわれ、どんどんと押し戻されていく。

「バロン、代わりにみてきてえ」

「面倒だからやだ」

「め、面倒って・・・」

ひどいと思うかもしれないが、背が低いのはご主人のせいなのだからしょうがないのだ。牛乳が嫌いだからっていつも残すから背が伸びない。だからこれはご主人のためを思っているのこうどうだ。決してただ面倒だったからなんて理由じゃない・・・本当だって。そうこうしているうちに、

「おゝい、シャル、俺たちFクラスだったぜ。いちこれからよろしくな」

と少し遠くから声をかけてきた蒼い髪はグレイだ。ご主人よりもい

くらか背の高い奴はクラスの確認を終えてこちらにきたようだった。ご主人もよろしくとかえしながら始業式が行われるらしい体育館へと足を進める。着いた先にあったのは、とても大きな建物であった。ここにくる途中、生徒たちが話しているのを小耳に挟んだのだが、体育館は授業などで使うことがあるそうだ。詳しくはわからないが、なんでも特殊な結界だかはってその中で魔法の実技練習などをやるのだそうだ。（道理でこんなに広いわけだ）

オレたちが体育館へと入るとすでに多くの生徒たちが集まっていた。高等部の一学年しかないはずだがさすがにFクラスもあるぐらいだから人数は多い。体育館の中はすごい喧騒につつまれていた。周りの生徒たちを見ると、これから始まる学園生活への不安と期待の入り混じったような顔をしている。生徒たちの声はなかなか収まりそうになかった。ふと前を見るといつの間にか、生徒とは違うローブを着た奴が一人ステージに立っていた。そしていきなり「静かにしてください：静かにしないと、にしますよ」と急にそう言った。大きな声だったわけじゃない。なにを言ったのかもわからない。だがその声にはただならぬなにかを感じとったようでさつきまでの喧騒が嘘のように生徒たちは静まり返っている。ローブの奴はいつの間にか姿を消していた。「で、ではただいまより始業式を始めます」と別の先生の合図で始業式が始まったのは二時間ほど前のこと。偉い人の話が長くてつまらないのはどこでも同じよう。で、ご主人のとなりでは 그레이 が堂々といびきをかいて寝ていた。ご主人はさっきの奴がさうとう怖かったようで 그레이 のせいで怒られないからとキョロキョロと周りを見回している、このヘタレめ。しかしオレも暇になってきたな。

「バロン、あれ見て」

ご主人の指差した方向を見た。さっきの奴が寝てた。

「あいつ自分が寝れなくてうるさいから注意したのか。なんて自分勝手なんだ」

「いや、おまえが言うなよ」

でもさっきのあいつはかなりの威圧感というかそんなものをまとっていたような気がする。かなりの実力をもっているのかもしれない。どうせオレの知ったこっちゃないがな。

しばらくすると（まあ、しばらくとつても二時間以上たつたあとだったのだが）始業式をやつとのことで終わり、これからすむことになる学園の寮へと案内された。その道中、

「グレイ、よく寝れたね。というか、いつ怒られるかと思うとひやひやして困つたよ」

「え？オレがかつこよすぎて困つた？何言つてんだよ、当たり前のことだろ」

「そんなこと言つてねえ！困つたしかあつてないよ、あとどんだけ自分のこと好きなんだよ」

相変わらず騒がしい奴らだ。教室までは高等部の上級生が案内をするのだが、構内は広いので教室に行くのも一苦労だった。しばらく歩くとFとかかれた札がある教室へついたのである。教室内は誰もが

「ああ、ここは倉庫なんだ、道にでも迷つたのかな」

と現実逃避したくなるの大きさだった。否、教室と呼んでいいのかさえわからない。教室への道中、小耳にはさんだ情報によるとなん

でもAクラスはかなりの高設備らしい。AからFまであるクラスのうち入学筆記テストの成績のいい順にAクラスから振り分ける仕組みになっているというこらししい。オレにはよくわからないが貧民と貴族みたいなものだろうか？ご主人はギリギリで試験を受けずに入ったためいきなりFクラスということだろう。災難だな、ご主人

「おいっ、こんなの聞いてねえぞ！！なんだよこの教室は」

「そうだよ、こんな場所で勉強しろってかよ！！」

そーだ、そーだと、ご主人のクラスメイトから次々に非難の声が上がっている。それもそのはず事前に知らされていなかったせい、文句を言う生徒は絶えなかった。そんななか、

「あらー、なんですか？この汚い家畜小屋のような部屋は？うちのペットですらもっと立派な部屋に住んでましてよ」

見るからに他の生徒とは格の違うローブ（さまざまな装飾がきらびやかに施されている）を身にまとい、そこに魔王城のようにずんっ！！と廊下に立ち、見下すような眼で周りを見ながら（明らかに見下しているのだが）そう言い放った。胸につけられているバッジ（始業式後に配られた）を見ると一年生でやはりAクラスのような。後ろには数人の女子を引き連れている。

「なんだてめ・・・え・・・」

当然そんなことをいわれれば黙っていられるはずもなく、言い返そうとした奴はしかし最後まで勢いよく言い切ることが出来なかった。しかも回りにいたほかの生徒たちはいつのまにかひざまずいていた。ご主人も不思議に思ったらしく隣にいるグレイに尋ねる。

「ねえグレイ、みんなあの人のこと知ってるの？ 様子がおかしいけど」

「ああ？ お前知らないのか？ ありや、今の現国王の娘、つまり王女様だぞ。この国に住んでりや知らないはずがないってことだ」

王女様といいつつもグレイにひざまずく様子はない。気づいてみれば立っているのはその王女様とやらと、ご主人とグレイだけだ。いいのだろうか、ご主人には今自分が危険な状況だってことわかってんのか？

「ロゼルティ様の前で堂々と立っているなんて、無礼でございましてよー！」

ロゼルティ様とやらの取り巻きのひとりが叫ぶ。周りの生徒も口々に謝ったほうがいいってなどといっている。しかしグレイは大して気にした様子もなく、

「王族だかなんだかしらねえが、この学園に入ったらそんなモン関係ねえよ。ここは実力がすべてを決める、実力のないものがなに言っただってそんなのは負け犬の遠吠えだ。権力振りかざしたいならよそでやれよ」

と啖呵をきってた。おおーっという声が上がる中、ロゼルティとやらは顔を真っ赤にできなきり声を上げていた。自分の思い通りにならない経験がなかったのだろう。

まったくこれだから王族は、とグレイがため息をもらしているところ

るに、

「でも、実力がなくてFクラスになった 그레이 がいつてもちよつと説得力にかけられるような・・・」

というご主人のつぶやきに 그레이 は余計なことをとご主人の頭をはたいていた。クラスのみんなもああ、確かにと、 그레이 のせつかくのかっこいいイメージをぶっこわしたご主人であった。

そんなこんなで、ワガママ娘との第一次戦は先生が来たことによつて終結した。ふう、やっと戻れると教室に入つた生徒はまた固まつた。担任はあの始業式の

よくわからない先生だった。今はフードをはずし緑色の髪をだらしなくうしろにながしダルそうな目つきで見回している。始業式の様子とはだいぶ雰囲気が違つていたので

みんな戸惑つている。

「私がこのクラスを担当するセシルだ。はい、じゃあ始めに出席を・・・とりません」

「・・・とらないのかよっ!!」「・・・」

みんながいつせいに突っ込んだ。ちゃらららったらーん。クラスの団結力がアップした。

「なにその擬音!? R P G かよ」

ご主人め、こころの中にまで突っ込んでくるとは、おぬしやるな。

「だれがおぬしだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7356e/>

使い魔なご主人

2010年12月26日18時38分発行